肺気腫と『ボラード病』

吉村萬壱
yoshimura manichi

昨年秋に、人間ドックで軽度の肺気腫と診断された。それでもしばらく煙草を吸い続けていたが、次第に呼吸が苦しくなってきた。肺気腫とは、肺胞が潰れた状態である。潰れた肺胞は二度と再生しない。したがって、このままではどんどん息ができなくなり、最終的には自分の肺の中で溺死するように死んでいくしかないらしい。

怖くなって、禁煙外来の門を叩いた。

チャンピックスという薬を処方された。ニコチンは脳の受容体に付着してドーパミンの分泌を促す。それが中毒の原因だという。チャンピックスはニコチンの代わりに受容体に付着し、少量のドーパミンを分泌させる薬である。最初は、チャンピックスを服用しながら煙草も吸っていた。ところが今年になって、普通に生活していても息が苦しくなってきた。深呼吸しても、肺が七割程度しか稼動していない気がする。寝ていても、息が苦しくて目が覚めたりするようになった。これはやばい、と思った。

三十五年間、ほぼ一日も欠かさず一日三十本吸い続けていた煙草を止めて、約一ヶ月になる。しかし、この禁煙は意志の強さとは全く関係がない。煙草を吸うと息が苦しく、煙草の煙より新鮮な空気のほうが美味しいと感じるようになっただけである。肺気腫は一定進行したようで、意識して深呼吸しないとちょっと苦しい。

それに加えて、ニコチンを止めた事による離脱症状か、絶えざる嗜眠状態が訪れるようになった。とにかく眠い。一日に五回ほど寝る。仕事への意欲は湧かず、鬱々した気分が続いている。呼吸も相変わらず楽ではない。風呂に入るだけで、はーはーする。

太古の昔、酸素は猛毒だったらしいが、今

はほとんどの生物は酸素がなければ一時も生きられない。ろくに意識などした事がなかった呼吸を、一日に何度も意識するようになった。吸って吐く事の繰り返し。これを人間は一生の内に何度行うのだろうか。呼吸が止まった時が死である。そして意識して呼吸する事で、呼吸の度に、つまり吸って吐き、吐いて吸うその折り返しの瞬間に、実は呼吸は毎回止まっているのだという事に否応なく気付かされた。即ち我々は呼吸の度に死に、呼吸の度に生まれ、生は連続したものではなく消滅と顕現の断続的な繰り返しなのであった。

祖母は肺癌で死んだが、最期まで意識はとてもしっかりしていた。そして、なかなか死ねない事を怒っていた。呆けないというのも考えものだと思った。最期は吸うばかりで息が吐けなくなり、やがて呼吸が止まった。呼吸というものは、折り返せなくなったらそれでおしまいなのである。吸うためには吐かねばならず、吐くためには吸わねばならない。その折り返しの瞬間、呼吸は止まる。即ち、生きる事は不断に死ぬ事である。

楽な呼吸が出来なくなって初めて、自分が存在している事が決して当たり前の事でないと思うようになった。呼吸とは結構大変な営みで、つまりは折り返しの度にエネルギーが要る。そうまでして自分がこの世に存在している理由は何なのだろうか、と思わずにいられなくなった。

私は現在五十四歳だが、こんな調子なのでそんなに長生きは出来ないと思う。恐らく自分の存在になど特別な意味は何もなく、川に浮かんだ泡のように意味なく生まれ、そして消えていくだけであろうし、それで一向に構わないと思っている。何か特別な存在であるほうが、却って迷惑と言うか、荷が重い。ムハンマドのように神に選ばれでもしたら、大変な事である。気にかかるのは、そんな私が何故ここにこうして存在しているか、という事である。存在していなければならない理由などまるでないにもかかわらず、どうして私は今ここにこうして存在しているのだろうか。こんな疑問に正解はないと思いつつ、意識的な深呼吸などを余儀なくされていると、どうしても生きている事、存在している事の理由について思いが向いてしまう。いずれ鼻からチューブを入れて酸素ボンベを引きずる生活になるのだろう。生きるというのはいろいろと大変である。

かつて、船の甲板の上で夜の港の景色を眺めていた事があった。

十年ほど前の事だろうか。印象的な出来事だったのでよく覚えているが、どこ行きの船に乗っていたかは忘れてしまった。船はゆっくりと港を離れて行った。対岸には工場や倉庫の灯りが点々と並んでいて、それが夜の海面に映り、何本もの光の筋となって揺れていた。その時、私はその幾つもの光の筋が一本残らず、暗い海の上を渡って私に向かって集まっているのに気付いた。即ち、私は光の扇の要の位置にいたのだ。もっともこれは当たり前の現象に過ぎない。もし隣に誰かいたとすれば、その人間にとっても又、すべての光が彼の許へと集まってくるように見えた事であろう。光は全方位的に放たれていて、それを見る者には自分に向かってくる光だけが見えるからである。それでもこれは、一種不思議な経験だった。

船の移動につれて見える景色も変わったが、すべての光の筋は私を目指して追いかけてきた。私はこの時、私が立っている甲板上のこの一点は私だけのものだ、という事を意識した。つまり、今私が占めているのと同じ位置に、別の誰かが同時に存在する事は決して出来ないのである。認識主体としての自分という存在はこの世で唯一無二である、この事実に私はハッとした。

もし私がこの世に存在している事に何らかの理由があるとすれば、この一点以外にないような気がする。即ち、「お前の目には世界は一体どう見えているのか、正確に述べてみよ」という事である。もし神の声が聞こえるなら、そんな具合ではないかと思う。誰もがこの世に存在している限り、個体差はあろう

がこの世界を何らかの形で知覚し、認識している。その認識する事こそが、我々の存在意味なのではなかろうか。何故なら認識する主体が存在しなければ、この世界が存在する事を証明する手がかりはどこにもないからである。我々一人一人が世界を認識する事によって、世界そのものを成り立たせているのである。一人の人間が占めている場所はその人間だけのもので、そして認識の仕方も個々人それぞれである。従って一人の人間の認識が変わるだけで、世界の全体像も影響を受ける。一人の人間が死んでいなくなれば、それは不在という形で世界を変えるだろう。世界七十二億の人間が残らず世界を認識し、この世界を作り上げているとすれば、どんな生にも存在意味はある事になり、私としても呼吸を続ける理由がもてる道理である。

●

ところがその一方で、私と他者とが置き換え可能な場合というものがあるらしい。

自分が他人ではないところの自己であるということは、一見なんの不思議もないことのように思われるが、それはけっしてそのような自明のことではない（木村敏『新編・分裂病の現象学』ちくま学芸文庫二五五頁）

西田幾多郎のいう「純粋経験」においては、自己とその対象とが全く一致していて、そこには我もなく非我もない。自己が自己自身でありうるためには、自己はまずこの純粋経験における他者あるいは世界との根源的同一性から自分自身を奪い取って「自己」として立てねばならぬ（同書二五六頁）

この「個別化」に失敗しているのが、統合失調症（精神分裂病）であるという。

いわば分裂病者はその歴史の一瞬一瞬において、絶えず繰返し分裂病者となり続ける（同書二五七頁）

分裂病者が分裂病者になり続けているのであれば、個別化も同様に不断の営みであり、失敗する可能性もあるという事だろう。自分の中に他人が侵入してきたり、自分と他者が入れ替わったりするような事態を想像してみる。「純粋経験」となるとちょっと難しい気がするが、病的な症状であれば得意分野で想像に難くない。AとBが等しくないと同時に等しいような認識が、決して我が身に起こり得ない事ではないと思えてくる。

●

そういった視点も含めて、私はこの世界を正確に見たいと思う。

世界を正確に描き出すには、どんな認知も漏らす事があってはならない。

自分だけではなく誰の視点にも立てる一種の分裂性のようなものが、小説家のような仕事には求められる気がする。

実際私は、どんな人間にでも成り得たに違いない。一定の環境に身を置いたなら、私は殺人者にも、悪徳政治家にも、虐殺する側にもされる側にもなっていただろう。凶悪な犯罪のニュースに接する度に、全く他人事ではないと思う。従って私は、正義というものにあまり関心がない。只一つの正しさなど有り得ない。正しさに対する妄信が時として最も残虐な蛮行を生む事は、歴史が証明している。「信念は、嘘よりも危険な真理の敵である」とニーチェも言っている。（『人間的、あまりに人間的』ちくま学芸文庫I四二三頁）

大切なのはただ一つ「本当の事」を提示する事である。ニーチェの言う「公正さ」という事だ。

―要するに、私は決心したのだ、過酷な、そして長い、新しい試練のなかへ入ってゆくことを、そして、能うかぎり遠く私の狭隘な視点を離れることを！　しかもおそらくはその途上で、またあらためて、ほかならぬ〈公正（ゲレヒティヒカイト）〉に出会わんがために。

（同上Ⅱ五二三頁）

一昨年の年度末に二十七年間勤めた教職を辞して専業作家になり、文芸誌に「ボラード病」という小説を書いて、去年の六月に単行本として出版した。結局小説というものは、「お前の目には世界は一体どう見えているのか、正確に述べてみよ」という事に尽きると思う。そしてこの「目」はただ一つの目ではなく、自分の狭隘さを離れた複数の、あるいは多数の、又は少数者の目であった。私は何が正義で何が悪かを主張するためではなく、善悪や価値の判断を加えずに、公正に「本当の事」が書きたいと思った。三・一一後の世界には、沢山の声なき声が満ちていて、私は後から考えると、それらの声にただ自分の受信機のチューニングを合わせただけであったと思う。何か巨大な悪を想定し、自分だけは正しい地点に立って悪玉を非難するというスタンスを取る事は出来なかった。現実は構造的にそのようになっていないからだ。大きな災厄があり、同じようにその禍を蒙りつつも、人によって反応は違った。すべてをなかった事にして生きるしかない人々と、なかった事にしては生きられない人々がいて、その中間の人々も大勢いた。何が真実なのかも、いまだによく分からない。そんな状況に単純なジャッジは下せない。

沢山の犠牲者を一まとめにして、何かしらの美しい物語へと回収してしまう事にも抵抗があった。犠牲者一人一人に個々の物語はあるに違いないが、全体を統べる物語などでっち上げに決まっているであろう。一つのスローガンの中に、一曲の歌の中に、一国の国旗の中に、みんなが収まらなければならない理由などどこにもない。死は一人として同じではなく、人は唯一無二の仕方で存在して、唯一無二の仕方で死に、唯一無二の記憶となり、それらは徹底的に個人の秘儀に属して、他人に公開する必要など全くないものである。しかし、にも拘わらず我々の命は、自他の区別なく全体として一つに溶け合って、生死を超えて絡まり合っているのかも知れないという漠然としたイメージはある。

たとえば、華厳の世界観は以下のようなものである。

各々のものは、それぞれ、無上の〈光〉を反射する鏡である。そして、すべての鏡は、それぞれに同じ無上の〈光〉を反射させながら鏡の一つ一つがすべて残りの鏡の反射であるような具合に、相互に反射し合っている。宇宙全体は、互いに向かい合った無数の輝く鏡として表象されるため、その世界は、底知れぬ深みを持った光の無限大の塊として見えるように形成されている。そのような状況では、一つの鏡のごくわずかな動きさえも、光の世界全体に影響を及ぼさずにはいない。

（井筒俊彦『禅仏教の哲学に向けて』ぷねうま舎一三七～一三八頁）

もしすべてが鏡であるならば、その反射は物理的な性質を帯びているであろう。機械的で無機的である。「無機的な世界においては誤謬が見当たらず」「有機的な世界において誤謬がはじまる」とニーチェは言う。（『生成の無垢』ちくま学芸文庫下巻一五〇頁）

過剰な有情を排し、本当は何が生じているのかを正しく知りたい。

人は死ぬまで生きていかなければならない。

私は時々呼吸するのが面倒臭くなる。吸っても吸っても、充分酸素が吸収されないからである。それでも一呼吸ごとに自分の存在が新たになり、それによって世界そのものも刻々と更新されていくのであれば、その世界を公正な目で認識し記述していく事には、やはり意味があると思う。特に今世紀は、もう何が起こっても不思議ではない。

勝手な判断を下さず、良いも悪いもなく、ただ正確に、非情な筆で本当の事を書いていけたらと思う。

（よしむら　まんいち・作家）
著書に『ボラード病』文藝春秋